

一般校との学的連携を基軸とした授業研究

—生徒の「わからなさ」を巡って—

教育学研究科 教育デザインコース 社会科専修

黒田朋弥・池田純・内田菜月・今野綾香・佐野隆太・田邊走美・塚越眞理子・内藤和貴・郎晨

授業者：藤沢市立秋葉台中学校教諭 長嶋 宏子

□テーマ設定の理由と研究の経緯

教育学は「理論」と「実践」の両輪から構成される。だが、実際には学問研究に根付かない教育実践や、実践をおざなりにする教育研究が散見される。理論と実践の連携・結合がいかんして成り立つのか、それが本研究の問題意識である。本研究は、これまでの3年間で、附属学校の実践研究と大学の学問研究とが学術的にいかなる回路を形成しうるのかということについて探求してきた。

そこで、今年度は附属学校を離れて一般校との学的連携を図り、生徒の「わからなさ」に焦点をあてながら授業分析を行った。なぜ「わからなさ」に着目したのかについて述べれば以下ようになる。

すなわち、授業においては生徒が「わかる」ことが目標にされ、授業者は生徒が「わかる」ような授業の枠組みを設計するということが自明なこととして考えられている。しかし、そこでは、授業者による「わかる」授業の枠組みに乗れなかった生徒が必ずいるはずである。そうした生徒は「考えていない」「思考していない」のではなく、むしろその生徒なりの個性的な考え方や思考の道筋といったものがあるのではないか、だとすれば「わからなさ」を視野に入れた授業を模索する必要があるのではないか。こうした問題意識が本研究の背景にはある。

本報告では、その「わからなさ」を中心に、大学側による授業研究の取り組みと、その取り組みが長嶋宏子教諭自身の授業観・生徒観にどう影響を及ぼしたかについて考察したものである

□研究のアプローチ

(1) 授業づくりにおける教科内容研究

①小・中学校社会科、高校地歴科・公民科の教科書分析

②教科書記述の背景にある各学問的分野における研究蓄積をレビュー

③社会科教育実践史における代表的な先行実践を分析

(2) 授業分析

①前記の研究成果を授業者に提供、授業の事前検討会に参加する。

②各授業を参観し、抽出児を設定して逐語記録をとり、分析。授業記録および分析・考察を授業者に毎回提供。各授業後、事後検討会に参加する。

□研究内容

(1) 授業づくりにおける教科内容研究

①教科内容研究の授業者への提示：

地理学（特に中国について）における先行研究成果や今日における研究動向を分析し、資料を作成・提供。

②地理教育（中国）における代表的な中学校実践・資料の提示：指導案、教材資料等のコピーを提供。

(2) 授業分析

長嶋教諭の授業を参観する。その中での子どもの思考のながれを把握するために記録を取り分析する。授業記録・授業分析は毎回（極力即日中に）授業者に提出する。

□成果と課題

・教科書分析は進んできたが、各学術的研究との関連における位置づけについては、なお検討段階である。

高校：日本史（江戸時代に関する記述）、地理（気候区分に関する記述）、政治経済（福祉に関する記述）、倫理（プラグマティズム、ルソー、ニーチェに関する記述）を分析。中学校：地理分野（開発教育に関する記述）を分析。小学校：3年（地域で働く人々に関する記述）、6年（法教育に関する記述）を分析。

・共同研究を通して授業者は「わからなさ」の要因を、自身や社会科授業とは異なる日常的な言語コード（見方・考え方も含めて）が様々にかつ生徒同士でも折り合わずに授業空間に持ち込まれるためだと考察した。強い閉塞的な言語コード・世界観に対して、どのような社会科授業が可能なのか。授業者と我々の課題として残った。